幼年教育研究年報　第23巻
The Annual Research on Early Childhood, 2001, **23**, 89-95.

資　料

幼児の相互作用場面における養育者の言語介入

湯澤　美紀[1]・倉盛美穂子[2]・入江　慶太[3]・陳　衛[3]・山崎　晃[4]

Parents' Wordings toward Their Child in Social Interactions between the Child and a Peer

Miki Yuzawa[1], Mihoko Kuramori[2], Keita Irie[3], Wei Chen[3] and Akira Yamazaki[4]

This research examined what parents think they will tell their child when they witness social problems of the child with peers. In a questionnaire, one hundred sixty-five parents of preschool children from the ages 3 to 6 years were presented with stories about social situations: conflict situations (e.g., a peer broke the child's castle of block) and prosocial situations (e.g., the child saw a peer who was unhappy about something), and asked to fill in their wording to the child. It was found that parents used several different types of wording in social situations, and that there were not systematic differences in these wording according to the child's sex and age. Other factors such as parents' believes about their own life and child-rearing might explain individual differences in wording towards the child.

Key Words: preschool children, parents, social problems, wordings

養育者は，子ども同士の相互作用場面において，状況や子どものとった行動に対し様々な解釈や評価を加える。概して，養育者は，子どもの他者を傷つける行為や言動を抑制し，他者に対する愛他行動を助長することを試みる。なぜなら，養育者はそれらの行動が，子どもの仲間関係を円滑に営ませるものであると信じているからである。

実際，攻撃児は，他者の過失による損害を受けて，他者の行為に敵意を帰属しやすいこと(片岡，1996)，そして，他者困窮状況における適切な他者感情の推測が，愛他的判断を促すこと（伊藤，1997)が指摘され，子どもは相互作用場面で生じる対人葛藤状況や他者困窮状況において様々な社会的情報処理を行っており，そこでの解釈や社会的行動についての評価が個人により異なっていることが明らかになっている。そのため，子ども同士の相互作用場面における養育者の言語介入は，子どもが適切な社会的情報処理を行う上で，重要な手がかりとなっていること，さらにはそこでの言語介入のスタイルが子どもの社会化を何らかの形で規定していることが考えられる。

そこで，本研究では，子どもの社会化のプロセスを明らかにしていこうとする試みの第一歩として，子ども同士の相互作用によって生じた対人葛藤状況ならびに他者困窮状況において，養育者が日常どのような言語介入を行っているのかという点を，探索的に調査することを第一の目的とする。第二の目的として，それらの言語介入が子どもの性別ならびに年齢によって異なるか否かといった点を明らかにする。

本研究で用いる場面は，子どもの攻撃行動についての情報処理が行われると想定される対人葛藤状況と愛他行動についての情報処理が行われると想定される他者困窮状況の２状況を設定する。さらに，各状況についてそれぞれ２つの場面を設定する。一つは，子どもにとって他者の意図が曖昧であり，子どもが

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2 日本学術振興会特別研究員
3 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期
4 広島大学教育学部附属幼年教育研究施設教授

それに対応した攻撃行動ならびに愛他行動を生起させていない（行動前）場面である（場面１）。そこでは，子どもにとって，他者の意図についての解釈が困難であるため，養育者が何らかの解釈を加えることが想定される。もう一つは，他者の意図が明確であり，それに対して子どもが攻撃行動あるいは愛他行動を行ったとされる場面である（場面２）。そこでは，養育者が子どもが行ったと想定される行動について何らかのフィードバックを行うと考えられる（Table 1参照）。

では、幼児の相互作用場面における養育者の言語介入は、子どもの性別ならびに年齢により異なるのであろうか。

実際，男子は女子よりも意図が曖昧な挑発を受けた場合に，敵意を帰属しやすいという結果（Parke & Slaby, 1983）が提示されており，女子はいざこざを最小限にするように情報を処理するのに対して，男子はいざこざを増大させるように挑発的な情報を処理しやすと解釈される（Dodge & Feldman, 1990）。そのため，養育者の言語介入が子どもの性別によって異なっていることが考えられる。その点については，対人葛藤状況における他者の意図が曖昧な場面１，もしくは他者の明確な悪意のもとにもたらされた攻撃行動に対して子どもが報復的攻撃行動を行うと想定した対人葛藤状況での場面２において検討される。一方，他者困窮場面の各場面（場面１，場面２）において，養育者の言語介入に性差は反映されないかもしれない。なぜなら，愛他行動自体に性差はほとんど確認されないことが報告されているからである。（Eisenberg, 1992; 二宮，首藤，宗方，1994）。一方，年齢については，特定の仮説は想定されない。

調査１

方法

調査対象者　東広島市内のH幼稚園の保護者88名（年少児クラス19名，年中児クラス34名，年長児クラス35名）であった。76名から回答が得られ，回収率は86％であった。

調査実施時期　アンケート用紙は，2000年９月中旬に各クラスの担任により一斉に配布された。アンケート用紙は，１週間後に，アンケート配布時に予め同封していた封筒に入れて所定のボックスに投函するよう求めた。

調査方法　質問紙により調査を行った。質問紙は４つの内容から構成されている。

まず，質問の冒頭に，「家族の中で子どもと最も長い接触時間を持っている方にアンケートに回答していただきたい」という旨を記した。次に，回答いただく方ならびに子どもについて，以下の４つの質問を行った。質問は，①養育者と子どもとの関係（母・父・祖母・祖父・その他，のいずれかを選ぶよう求めた），②養育者の職業の有無，③養育者の年齢，④対象となる子どもの出生順位であった。

次に，対人葛藤状況ならびに他者困窮状況において各２場面，計４場面についてどのような言語介入を行うか，最も用いそうなことばがけから順に３つ

Table1 本研究で用いられた子どもの社会的相互作用の内容

	場面１（各行動前）	場面２（各行動後）
対人葛藤状況	他者の過失に引き起こされた、ネガティブ状況 例：積み木作り状況 主人公が一生懸命積み木づくりを行っている。そこに通りかかった他児が誤って、作り上げられた積み木を壊してしまう。	他者の悪意を持って行われた攻撃行動に対して、報復的な攻撃行動を行う 例：砂山作り状況 主人公が一生懸命砂山づくりを行っている。それを見ていた他児が主人公に意地悪をしようとその砂山を壊してしまう。
他者困窮状況	他者の表情と場面が一見矛盾する他者困窮場面：喜ぶはずの状況で、他者が悲しそうにしている。 例：くじ引き状況 主人公と他児は一緒にくじ引きをしている。主人公は当たり、ビー玉２つを得る。他児も当たった。しかしそれは、欲しかったビー玉ではなく、ネコのカードであった。	他者の表情と場面が一致した他者困窮状況であり、そこで、子どもは愛他行動を行う。 例：ドングリ落とし状況 他児は、両手いっぱいにドングリを抱えて歩いている。しかし誤ってそのドングリを床いっぱいにこぼしてしまう。そこで主人公はドングリ拾いを手伝ってあげる。

(1～3)，自由記述による回答を求めた。4場面の提示順は調査対象者ごとにランダムであった。なお，1つの場面ごとに2つの類似した内容のストーリーを予め用意し，調査対象者ごとにいずれかの内容を適宜，採用した。提示される場面は，3つのコマから構成される。時間的な経過に伴ない，1コマ目から3コマ目までの各コマについて状況の説明を質問紙（資料1参照）に付与させた。そして養育者には，3コマ目でどのような言語介入を行うか回答を求めた。場面の冒頭では以下の教示を行った。「以下のお話を想定してください。場面中のA（主人公）があなたのお子さまです。あなたはそばで様子を見ています。場面③であなたはお子さまにどのような言葉がけを行いますか。最も用いそうな言葉がけから順番（1～3）に3つお答えください。」であった。すべての場面で，登場人物は，主人公（養育者の子どもと想定する）と他児1名のみであり，養育者は場面中には登場しない。なお，主人公の顔の表情は表現していない（資料1参照）。

次に，養育者の子どもにの発達期待について求めた。発達期待に関する質問は，東・柏木・ヘス(1981)で用いられた自立（6項目，例：一人遊びができる，自分の脱いだ服を始末できる）と社会的スキルの獲得（8項目，例：友だちを説得して，自分が考えていること，したいと思っていることを通すことができる。友だちと遊ぶとき，言いなりになるだけでなく，リーダーシップがとれる。）に関する14項目からなる。そこでは，各項目について，いつ頃までにできるようになってほしいか（あるいはなっていてほしかったか）を尋ねた。3歳まで，4歳まで，5歳まで，6歳まで，6歳すぎのうちのいずれかから選ぶよう求めた。

最後に養育者の志向性について尋ねた。志向性とは，自己概念を形成する際の基準の方向性を意味するものである。そこでは，自分自身の内的基準への志向性としての自己志向性と，社会の規範への志向性としての社会志向性が想定されている（伊藤，1993）。実際，これらの志向性は個人の特性を表すものであり，個人差が確認されている（伊藤，1993）。そこで，伊藤(1993)の個人志向性・社会志向性尺度（個人志向性8項目，社会志向性9項目）を用い，養育者の志向性を求めた。各項目について，とてもあてはまる～全くあてはまらないまで，5段階評定を求めた。

なお，本研究では，子どもの社会的相互作用場面における養育者の言語介入の分類・検討を行うものであり，養育者の発達期待ならびに志向性と子どもの社会化ならびに言語介入スタイルとの関連については，別の機会に行うこととする。

アンケート用紙は，依頼状（1ページ目）を含め全部で8ページであった。

結果

<u>各場面における言語介入の種類の分類</u>　得られた自由回答（場面ごと1番目から3番目までを含む）は，対人葛藤状況での場面1で184，対人葛藤状況での場面2で180，他者困窮状況の場面1で219，他者困窮状況の場面2で223であった。

調査者2名により，すべての自由記述は場面ごとに，意味的に類似したカテゴリーに分類された。極めて少数の発話から構成されたカテゴリーはその他として分類した。最終的な話し合いの結果，各場面において，以下のような言語介入の種類が同定された（Table2，Table3，Table4，Table5参照）。

Table2 対人葛藤状況の場面1での言語介入の種類

カテゴリー	具体的な内容
偶発性の説明	Bちゃんはわざとじゃないんだから仕方ないでしょ 怒っちゃだめだよ。わざとじゃないからしょうがないよ
ネガティブな状況についての説明	あ-あ。壊れちゃったね 残念だったね。Bちゃん足があたったね
次の行動についての促し	Aちゃんもう一度高く積み木を重ねてみて 今度はお母さんと一緒に作ろうか
対人葛藤状況からの逃避	違うことして遊ぼうか 今度は違う場所で作ろうか？
無反応	言葉かけしない （だまってみている）
その他	Bちゃん怪獣がやってきたね Bちゃん近くでこれ見たかったのかなー

Table3 対人葛藤状況の場面２での言語介入の種類

カテゴリー	具体的な内容
攻撃行動の禁止	突き飛ばしたらいけないよ Aちゃん押したらダメよ。Bちゃんがいたよ
理由承認（後の攻撃行動の禁止を含む）	壊されたのがいやだったね Bちゃんが悪いけど、突き飛ばしたらダメだよ
自己主張方略の提示	そんなことしないでBちゃんに「やめて」って言ってごらん 突き飛ばす前に、いじわるしないでって言えばよかったのに
謝罪・仲直り方略の提示	Bちゃん、Aちゃんにごめんねしようね 一緒に遊んでみたらどうかな？
相手の行動に関する解釈	Aちゃん、Bちゃん一緒に遊びたかったんじゃないの？ （ポジテイブな解釈） 意地悪で人の作ったものを壊すのはいけないね （ネガティブな解釈）
次の行動についての促し	もう１回作ったら？ お母さんと一緒にまた作ろう
無反応	あ-あ（ほっとく） 何も言わないで。どうなるか様子をみる
その他	Bちゃん怪獣がトンネルを壊したんだね どうして突き飛ばしたりするの

Table4 他者困窮状況の場面１での言語介入の種類

カテゴリー	具体的な内容
愛他行動の提示	ビー玉、１こずつ分けたら？（贈与） Bちゃんにビー玉一つと猫のカードを交換してあげたら？（交換） ちょっと貸してあげようかね。（賃貸）
相手の心情についての解釈	Bちゃんはネコのカードだったんだって，残念だったね Bちゃん、可愛そうだね
両者アイテムの同質化	Bちゃんのカードもステキだよね ママは、猫ちゃんのカードも好きよ
無反応	言葉かけしない （だまってみている）
その他	Aちゃんも、B ちゃんも当たったね。 お母さんもくじしようかな どんなのか見せて

Table5 他者困窮状況の場面２での言語介入の種類

カテゴリー	具体的な内容
愛他行動に対する承認	えらいね。一緒にお手伝いしてあげるんだね 上手にお手伝いできたね
愛他行動の促進	がんばれ、がんばれ どっちがたくさん拾えるかなよーいドン！
他の愛他行動の促進	Bちゃんどんぐりが多すぎてまた落としちゃうから、ポケットに入れてあげたら？
子どもの性格特性に関する承認	Aちゃん優しいのね。Bちゃんが助かるからたくさん拾ってあげてね Aちゃん、やさしかったね。
他者のポジティブな感情生起についての叙述	よくできたね-,Bちゃんも喜んでいるよ Bちゃんきっとうれしかったと思うよ
無反応	言葉かけしない 何も言わない
その他	Bちゃんはたくさんどんぐりを拾ってきたんだね ねえ、どうして拾ってあげようと思ったの？

調査2

調査1では，対人葛藤状況ならびに他者困窮状況で行われる養育者の言語介入の種類を明らかにした。そこで，調査2では，調査1のデータに新たなデータを追加し，子どもの相互作用における養育者の言語介入が，子どもの性別ならびに年齢によって異なるか否かという点について検討を行っていく。

方法

調査対象者　調査1に，広島市内のW保育園の保護者155名（年少児クラス49名，年中児クラス51名，年長児クラス55名）を加えた。そこでは90名から回答が得られ，調査1のH幼稚園で得られた76名を加えて，233名のうち，165名から回答を得ることができた。回答者と子どもとの続柄は，母親が157名，父親が5名，祖母が3名であった．回収率は68.3%であった。そのうち，子どもが男児の人数は，76名であり，女児の人数は89名であった。また，年少児が40名であり，年中児が60名，そして年長児は65名であった。なお，提示した4場面のうち，いずれかの場面で回答が行われていなかった（無記入）場合も，回答データを分析の対象とした。場面間にみられる人数の違いはそのことを反映するものである。調査実施時期ならびに調査方法は，調査1と同様であった．

結果

分類方法　養育者の言語介入は，各状況（対人葛藤状況・他者困窮状況）の各場面で，養育者が子どもに対して最も用いそうなことばがけから順に3つ（1～3），自由記述により回答を求める。

そこで得られたデータのうち，最初の欄に記入された回答を，それがその養育者がもっとも頻繁に用いる言語介入であると考え，そこでの内容を調査者2名により，調査1で得られた各場面での言語介入カテゴリーのいずれかに分類した。そこでの一致率は，対人葛藤状況の場面1で92%，場面2で85%，他者困窮状況の場面1で84%，　場面2で88%であった。不一致項目は，調査者2名による協議により再びいずれかのカテゴリーに分類された。

各場面で用いられた言語介入の頻度における子どもの性別ならびに年齢の効果　各場面で得られた言語介入の各カテゴリーについて，対数線形モデル分析により，子どもの性別と年齢との連関（言語介入カテゴリー×性別，言語介入カテゴリー×年齢）を検討した。もし，養育者の言語介入の内容が子どもの性別ならびに年齢により影響を受けるならば，言語介入カテゴリーと性別，もしくは言語介入カテゴリーと年齢との間に交互作用が見られるはずである。分析を進めるにあたって，一つのカテゴリーに分類された言語介入が10に満たなかったものは，再度，「その他」のカテゴリーに分類された。最終的な分類結果はTable6，Table7，Table 8，Table9に示している。なお，結果は，統計パッケージSTATISTICA(Stat Soft)により処理された。

その結果，すべての場面において，言語介入カテゴリーと性別，もしくは言語介入カテゴリーと年齢に交互作用は見られず，子どもの性別ならびに年齢が養育者の言語介入に影響するものではないことが示された。

Table6 対人葛藤状況の場面1で行われた言語介入（人数）

回答者の子どもの性別ならびに年齢 カテゴリー	男児	女児	年少児	年中児	年長児
偶発性の説明	22	26	14	15	19
ネガティブな状況についての説明	25	30	11	22	22
次の行動についての促し	22	21	12	18	13
その他	7	12	3	10	6
合計	76	89	40	65	60

Table7 対人葛藤状況の場面2で行われた言語介入（人数）

回答者の子どもの性別ならびに年齢 カテゴリー	男児	女児	年少児	年中児	年長児
攻撃行動の禁止	31	38	17	29	23
理由承認（後の攻撃行動の禁止を含む）	7	11	5	8	5
自己主張方略の提示	14	17	8	14	9
謝罪・仲直り方略の提示	12	15	5	9	13
その他	11	8	5	5	9
合計	75	89	40	65	59

Table8 他者困窮状況の場面1で行われた言語介入（人数）

回答者の子どもの性別ならびに年齢 カテゴリー	男児	女児	年少児	年中児	年長児
愛他行動の提示	34	29	16	27	20
相手の心情についての解釈	10	15	10	10	5
両者アイテムの同質化	20	28	10	19	19
その他	11	17	4	8	16
合計	75	89	40	64	60

Table9 他者困窮状況の場面2で行われた言語介入（人数）

回答者の子どもの性別ならびに年齢 カテゴリー	男児	女児	年少児	年中児	年長児
愛他行動に対する承認	43	47	23	32	35
愛他行動の促進	9	13	4	8	10
子どもの性格特性に関する承認	11	9	4	13	3
その他	12	19	9	11	11
合計	75	88	40	64	59

考察

本研究では，まず，第一に，子どもの相互作用場面で行なわれる養育者の言語介入の種類を同定し，次に，そこでの言語介入が子どもの性別ならびに年齢により異なるか否かと行った点について検討を行った。

本研究では，回答者の子どもを主人公とし，子ども同士の相互作用場面として4場面を設定した。その場面は，対人葛藤状況で他者の過失により引き起こされたネガティブ場面，他者の悪意を持って行われた攻撃行動に対して，子ども（主人公）が報復的な攻撃行動を行う場面，そして，他者困窮状況で他者の表情と場面が一見矛盾する場面，ならびに他者の表情と場面が一致した他者困窮状況で子ども（主人公）が愛他行動を行う場面であった。各場面において，状況に即した多くの解釈的・評価的言語介入が行われていた。

しかし，そこで行われる養育者の言語介入に，子どもの性別と年齢の要因は反映されなかった。それは，どのような理由によるものであろうか。

まず，一つの可能性は，自由回答の分類方法に起因する。本研究では言語介入を，内容によって分類した。そのため，そこでは，自由回答で得られた言葉がけについて，その長さやわかりやすさといったものは考慮されていない。もし，それが子どもの性別ならびに年齢から何らかの影響を受けるものであるとするならば，本研究の分類方法では，その点は明らかにされない。

次は，設定した場面で養育者が最も行うであろう言葉がけについて回答を求めたが，それが，現実の言葉がけを反映していなかった可能性である。実際に行われる言語介入は，そこでの様々な状況に即して行われる。しかし，本研究で設定したような，限られた情報のみが提示された状況では，望ましい言語介入を回答した可能性が考えられる。この点については，実際の母子相互作用場面を通して確認する必要がある。

最後の可能性は，実際，子どもの相互作用場面における言語介入は，子どもの要因よりもむしろ養育者自身の要因を反映しているかもしれないというものである。本研究の調査の一部に，養育者の志向性ならびに子どもに対する発達期待について評定を求めている。そこで得られた養育者がどのように生きているのかといった志向性，もしくは子どもに対する発達期待が，子どもの相互作用場面での言語介入に反映されることが考えられる。その点については，今後，検討されるべき課題である。

引用文献

アイゼンバーグ, N. 1994 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子（共訳） 思いやりのある子どもたち 向社会的行動の発達心理 (Eisenberg, N. 1992 *The caring child.* Harvard University Press Harvard: U.K.)

Dodge, K. A., & Feldman, E. 1990 Issues in social cognition and sociometric status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood (pp. 119-155).* Cambridge, England: Cambridge University Press.

東洋・柏木恵子・ヘス, R.D. 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究 東京大学出版会

伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64, 115-122.

伊藤順子 1997 幼児の向社会的行動における他者の感情の役割 発達心理学研究, 8, 111-120.

片岡美奈子 1996 攻撃および非攻撃幼児の敵意帰属に及ぼすムード操作の効果 教育心理学研究, 45, 71-78.

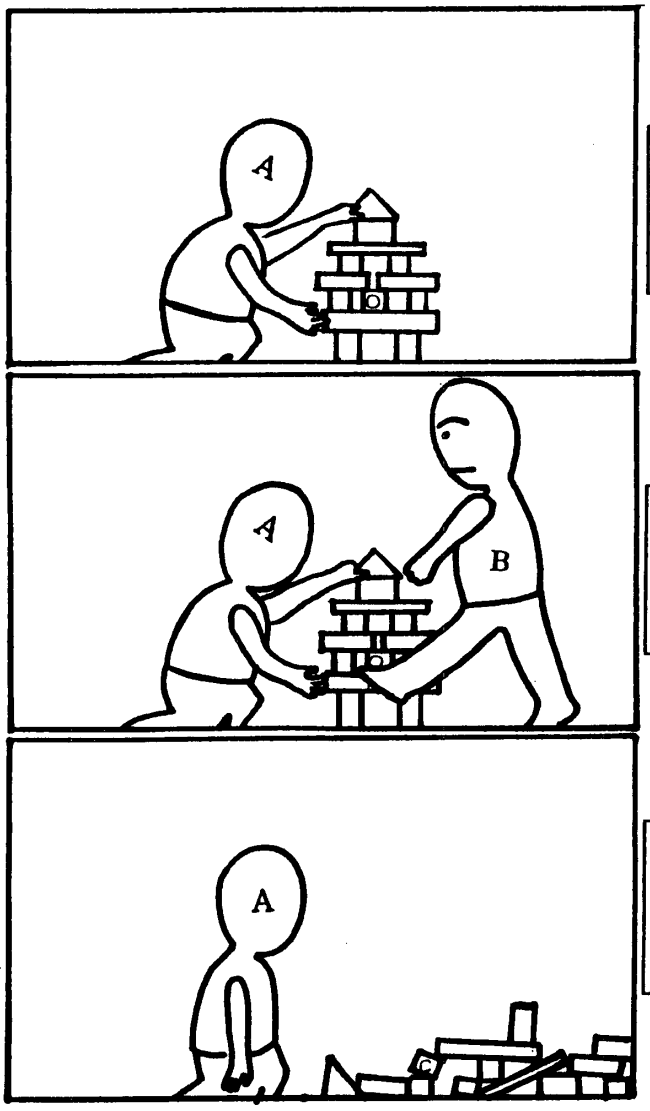
森下正康 1985 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング—教師モデルに関する受容的 —拒否的態度の認知の影響— 心理学研究, 56, 138-145.

Parke, R.D., & Slaby, R.G. 1983 The development of aggression. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4. Personality and socialization processes (pp. 547-641, 4th ed.).* New York: Wiley.

謝辞

本調査にご協力いただきましたH幼稚園, W保育園の先生方ならびに保護者のみなさまに感謝いたします。なお, 本研究は, 広島大学 山崎晃教授主宰の発達研究会により進められたものであり, 研究を行うにあたり発達研究会メンバーより, 貴重な示唆をいただいた。ここに感謝の意を記したい。

資料1 本研究で用いた子どもの相互作用場面を表す線画(対人葛藤状況の場面1)



場面①：Aちゃんは楽しく積み木遊びをしています。

場面②：友達のBちゃんが誤ってその積み木を壊してしまいます。

場面③：